

アナイティカ II

佐藤 進

古代イランの女神アナーヒターに関するノート「アナイティカ I」[佐藤 1960]を発表したのち、私の研究は他の方向に移っていった。しかし、最近メディアやペルシアにおける民族や国家の形成を取り扱い[佐藤 1994 ; 1996], それに深くかかわる言語や宗教の問題を新らしく考えてみる必要が起こってきた。こうして、往時の「第5ヤシュト」翻訳草稿を読み直す作業に取りかかっていたところ、たまたま「伊藤義教博士追悼号」寄稿のお誘いをいただいた。先生を記念するにはあまりにもささやかであるが、私が現在かかわっている仕事のなかから若干をノート「II」として献呈することにしたい。

1 hizuuārēna- ?

Yt. 5. 6 : yam azəm yō ahurō mazdā hizuuārēna uzbaire fradaθāi nmānaheca …

この一節について、バルトロメはヤシュト本文の hizuuārēna の読み方をまだ不確実なものとし、その部分を保留して「余、アフラ・マズダーは、家族と……を繁栄させるために、彼女(アナーヒター)を…(hizuuārēna)…生み出した」と訳している(括弧内は筆者の補足)[AirWb : 1816 ; Wolff 1910 : 167]。その後、バルトロメの見解は通説として広く受け入れられてきた[cf. Barr 1954 : 120 ; Malandra 1983 : 120]。

しかし、すでにダルメストゥテール [Darmesteter 1892 : 368 et n. 3] は hizuuārēna を hizuuā-arēna 「ことばのはたらき」と推定し、「ことばの力によって」の訳を示していた。この提案は、ヴェラー [Weller 1938 : 107 (apud Kellens 1994 : 121, n. 19)] によって注目されていた。

最近、ダルメストゥテールの示唆にもとづき、前半構成要素に hizū-, hizuuā-「舌、ことば」をとまう合成語として hizuuārēna の語義を新しく説明しようと試みているのがケランである。彼によれば、hizuuārēna は *hizū-āuuarēna 「ことばによる(言表された)選択によって」の重音綴が脱落した語形である [Kellens 1994 : 121, n. 19]。

ところで、いままでの議論はすべて、ゲルトナー [Geldner : II 83] によって標準語形として選ばれた hizuuārēna を前提として行われてきた。しかしながら、この語形は第5ヤシュトのいずれの写本にも認められていない。ゲルトナーが根拠としたのは、ニヤーイシュ第4章第7節 [Geldner : II 48] に伝えられたものである。

そこで、第5ヤシュトとニヤーイシュの各写本に現れるこの語の異形について対照表を作

成し, 検討してみたい。写本記号はゲルトナーにしたがう。なお, ゲルトナー以後, いくつかの写本が紹介されている [cf. Panaino 1990 : 15-16 ; Hintze 1994 : 57] が, ここではとりあえずゲルトナーのテキスト校合資料に拠ることにする。

Yt. 5. 6		Ny. 4. 7	
		hizuuārēna	Lb 1. K 18b. Pt 1. (Geldner)
		hizuuārana	K 19
		hizuuāran	O 3
		hizuuārē/ine	L 18
hižuuārāne	K 12		
hezuuārēn	J 10		
		huzuūārana	P 13
		uzuūārēna	L 25
		uzuūārēn	J 10. K 12
		hazuūārēna	F 1. E 1. Mb 1. L 11
		hasuuārūna	J 9
		hazau····	Jm 4
haza. uuārēn	P 13. K 19		
haza. uuārēn	L 18		
haca. vārēn	F 1. Pt 1. E 1		

この対照表においてまず注目されることは, 同一写本であっても第5ヤシュトとニヤーイシュの語形が異なることである。ニヤーイシュはヤシュトのなかの祈禱文を採録し, それを中心に構成されたものであり, もととはヤシュト引用部分について一致していたはずである。差異を生ずるようになったのは, ニヤーイシュがたえず口承され, そのために改変されがちであったのにくらべて, ヤシュトは文字から文字へといっそう正確に伝えられたことに因る [Geldner : Prolegomena xl, xlvii]。

写本の語の異形について, とりわけ haca. vārēn が独特な形を示しており, 検討資料から排除されなければならないようにみえる。しかし, 本文批判の手続きにおいて看過しえないのは Manuscripta ponderantur non numerantur の教えである。

祈禱集であるニヤーイシュには, 宗教的配慮のおよぶ可能性がヤシュトよりはるかに大きい。意味ははっきりしなくなった古い特殊なことばは, 信仰の立場からよりよく説明できる語形にあらためられがちである。ゲルトナーによって標準語形とされ, これまでの語義解釈の基礎となっていた hizuuārēna は, すでに述べたように, hizū-, hizuuā-「舌, ことば」をふくむ合成語として説明されうる。この語は, ゴロアスター教の儀式において特別の意義をもつ。

たしかに *hizū-*, *hizuuā-* をともなう語形がニヤーイシュのみに証され、ヤシュトに現れていないことは示唆的である。そのみならず、ニヤーイシュの *hizuuārəna* からヤシュト異本の *haca. vārən* にいたる変移の理由を説明することは困難である。むしろ、その反対の過程を分析する方が容易である。

ヤシュトに伝えられた *haca. vārən* の方がよりいっそう原形に近いという仮定を確かめるためには、写本の成立年代や系統についての検討が必要である。この問題はすでにゲルトナー [Geldner : Prolegomena] によってくわしく考察されている。その後に提出された修正意見 [cf. Panaino 1990 : 9 ; Hintze 1994 : 58] も、彼の研究を基礎にしている。

現存するヤシュト写本のなかで、最古のもっとも重要なテキストは F 1 (1591年) である。つづいて E 1 (1601年), Pt 1 (1625年) が作成され、三者はいずれも *haca. vārən* の語形を示している。*haza.* をともなう語形は L 18 (1672年), P 13, K 19 に現れており、これらの写本はすべて Pt 1 の系統に属するものと考えられる。K 12 (1801年) もこの系統にふくまれるが、語形はかなり変異しており、他の影響を考えなければならない。J 10 (1832年) とペルシア文字の転写をとともなう新しい写本 M1 2 は、別の系統を代表している。前記の K 12 が関連していたのもこの系統である。興味深いのは M1 2 と L 25 のニヤーイシュ写本の語形が共通していることである。L 25 (1803年) もペルシア文字の転写をとともなう写本である。複数の系統がさまざまに想定されているが、相互の関係については議論も少なくない。ここで別系統とされたものについても、F 1 の影響をうけた中間の段階を J 10, M1 2 以前に設定する見解がある [Hintze 1994 : 58]。

ニヤーイシュをふくむ「小アヴェスター」の写本の系統については、伝承の性格ともあいまって、まだ十分に調査されていないように思われる。ここでは、写本年代の古いものから、とくに *-uu-* の前の部分に注目して語形の変移をたどってみることにする。

14世紀半ばの J 9, Jm 4 (1352年) ではそれぞれ *has-*, *haza-* であり、16世紀末から17世紀初頭の F 1, E 1 では *haz-* である。しかし、ヤシュトの本文では F 1, E 1 とおなじく *haca. vārən* と記していた Pt 1 は、ニヤーイシュにおいて *hiz-* の語形を使用しており、これがゲルトナーによって標準語形とされたものである。*huz-*, *uz-* は *hiz-* より後代に現れる。*uz-* は K 12, J 10, M1 2 にみられ、これらの写本がいずれも他の系統にかかわることは注目される。

問題の語形について、写本の比較分析からつぎの諸点が明らかにされる。

- (1) 16世紀末から17世紀前半のヤシュト写本において *haca. vārən* であった語形が、17世紀後半に *haza. uuarən*, *haza. uuārən* に変移する。すなわち、*c* → *z*, *v* → *uu* の書き換えがおこなわれる。
- (2) ヤシュトの他の異形 *hižuuarane*, *hezuuārən*, *uzuūārəna* は別系統に関係のある、いずれも19世紀に成立した写本に由来する。
- (3) ニヤーイシュでは、14世紀において *hasuuārūna. hazau-...*, 16世紀末から18世紀前半 (L 11 : 1723年) の写本に *hazuūārəna* の語形が認められる。

- (4) 16世紀前半に *hizuuārēna* が現れてから、これがニヤーイシュ写本における基本的な語形となる。
- (5) *uzuuārēn*, *uzuuārēna* の異形が、19世紀に成立した別系統のニヤーイシュ写本に見いだされる。

以上の諸結果にもとづいて、つぎの推論が可能になる。

ヤシュトの本文伝承はニヤーイシュの場合にくらべてはるかに保守的であり、したがって、F 1 に筆写された *haca. vārēn* がもっとも原形に近い。しかしながら、ニヤーイシュでは、*hasuuā-*, *hazau-*, *hazuuā-* の語形変化がすでに進行していた。*c → z*, *v → uu* の書き換えが17世紀のヤシュト写本におこなわれているのは、明らかにその影響によるものである。F 1 とは別の写本系統が想定され、そこではたしかに異なった語形が伝えられているが、いずれも19世紀の写本から知られるものであり、検討資料としては不十分である。なお、ニヤーイシュにおいて、17世紀に *hazuuārēna* とならんで *hizuuārēna* が現れてくるのも、すでに指摘したように、その語に *hizū-*, *hizuuā-* を認めようとする教義的な理由によるものと考えられる。

ゲルトナー版の Yt. 5. 6 テクストの *hizuuārēna* は *haca. vārēn* に訂正されなければならないし、いっそう正確には *haca vārēn* と表記さるべきである。

ところで *haca* は前置詞であり、奪格をともなって「～から」の意味を示す。*vārēn* は中性名詞 *vāran-* の単数奪格形 [cf. Hoffmann & Forssman 1996 : 143] と考えられる。この *vāran-* は『アヴェスター』に証されていない単語であるが、明らかに語根動詞 *VĀR*「雨が降る」[AirWb : 1410, 'vār- ; Kellens 1995 : 53] の語彙に属している。*VĀR* から派生した名詞形として *vāra-*「雨」(男性形) [Kellens 1974 : 370] とともに、*vāran-*「雨」(中性形) が存在したことは疑いない。なお、mp. *wārān*「雨」、np. *bārān*「雨」も参考になる。

すでにロンメル [Lommel 1927 : 33 & n. 1] は問題の語に「雨」の意味がふくまれていることを推定し、疑問符をつけて「雨とともに」の訳を示しているが、F 1: *haca. vārēn* についてはまったく考慮してしていなかった。

こうして、Yt. 5. 6 の当該箇所はつぎのように訳することができる。

「余、アフラ・マズダーは、家族と……をふやすために、雨から彼女(アナーヒター)を生み出した」

2 θraiiuuan-

Yt. 5. 86 : θβ_{am} āθrauuanō marēnō āθrauuanō θrāiiaonō mastīm jai^odīiānte

ダルメストゥテルは、この引用箇所について「朗読する祭司たち、祭司たちとその弟子たちは、汝に知恵を求めるであろう」の訳を示している [Darmesteter 1892 : 387]。そして、*θrāiiaonō* < *θrāiiuuan-* を「弟子」と解釈した根拠として、つぎの第4ヤシュトの一節を挙げ、その文脈から明らかにされるとしている。

Yt. 4. 9 : *aētəm maθrəm mā fradaxš aiio aniiāt piθre vā puθrāi brāθre vā haδō.zātāi āθrauuānāi vā θrāiiaone* 「ただ、父によってその息子に、兄弟によってその同胞に、祭司によってその弟子にだけ、この聖言を教えさせよ」[ibid. : 361 & n. 30]。

すなわち、父が息子、兄弟がその同胞に教えるように、祭司が教えるのは弟子であるに相違ない、というわけである。なお、この一節は Yt. 14. 46 にも現れてくる。

しかしながら、バルトロメは *θrāiiauuān-* を *āθrauuān-* 「祭司」の形容詞とみなし、ダルメストゥテールにも言及しながら、その語義を不明であるとした[AirWb : 805]。研究者の多くはバルトロメの見解にしたがい、第5ヤシュトのこの部分は空白のままに訳されてきた[cf. Lommel 1927 : 39 ; Barr 1954 : 135]。

その後、ダルメストゥテール説はゲルシェヴィチによって再評価された。彼は第4ヤシュトの当該部分を「息子(への伝達)のために父に、あるいは同胞兄弟(への伝達)のために兄弟に、あるいは弟子(への伝達)のために祭司に以外は、この聖言を教えるな」と訳し直し、さらに、*θrāiiauuān-* の新しい語義解釈を試みている。彼によれば、この語は「**θrāya-* に出席する」学生を意味しており、**θrāya-* (**θrāya-* 「三部から成る」の中性名詞)は3年の期間と3人の教師を必要とする学問研究の3コースを指示しているという[Gershevitch 1959 : 209f.]。史料選集を意図した最近のマランドラの『古代イラン宗教史入門』も、ゲルシェヴィチの主張を取りいれて訳している[Malandra 1983 : 126]。

ダルメストゥテールとゲルシェヴィチに共通する論拠は第4ヤシュトの引用文脈であるが、そこで祭司と組み合わされるのが弟子なり学生とただちに判定することはできない。また、**θrāya-* に関するゲルシェヴィチの説明は、信仰の知識を学ぶには1年間1人の教師のところに通い、3年間の修学を義務とするという『ニーランギスターン』の記述、そこから3人の教師に就いてそれぞれ1年ずつ学習する慣例を読みとることができるというバルトロメの注釈[AirWb : 20, s. v. *aēθra-patay-*]を、**θrāya-* 「三」に結びつけたものにすぎない。このような聖職教育にかかわる重要な用語が、『アヴェスター』のみならず、後代文献にも検証されていないことはきわめて訝しい。

θrāiiauuān- についてももっとも妥当とみなすことができるのは、これまでほとんど注目されてこなかったヘルテルの所説である。彼は *θrāiiauuān-* を *θRĀ* 「保護する」の現在語幹 *θrāiia-* + *-uuān-* によって語形成された、「保護をあたえる」とか「保護する」の意味をもつ形容詞と考えた[Hertel 1931 : 182 & n. 2 ; 234]。

ヴェラーも同じ立場と思われるが、彼なりに語義を敷衍して、*θrāiiauuān-* を「予防手段、すなわち、呪術手段の所有者」と解している[Weller 1938 : 201 (apud Gershevitch 1959 : 209. n. 1)]。しかし、その論拠は確かではない。

θrāiiauuān- は、Yt. 5. 86 の文脈から判断して、*āθrauuān-* を修飾する形容詞としなければならない。したがって、この引用箇所はつぎのように訳される。

「記憶しているアースラワン祭司たち、保護をあたえるアースラワン祭司たちが、汝に知識

を願うであろう」

また, Yt. 4. 9 (cf. Yt. 14. 46) も, つぎのように訳される。

「父,あるいは息子,あるいは同胞の兄弟,あるいは保護をあたえるアースラワン祭司のほか
に,この聖言をだれにも教えるな」[cf. Hertel 1931 : 182]

参考文献

- AirWb : Bartholomae, Chr. (1904) *Altiranisches Wörterbuch*. Strassburg.
- Geldner : *Avesta*, hrsg. von K. F. Geldner. Prolegomena (1896), I (1886), II (1889), III (1896). Stuttgart.
- Barr, K. (1954) *Avesta*. København.
- Darmesteter, J. (1889) *Le Zend-Avesta*. II. Paris.
- Gershevitch, I. (1959) *The Avestan Hymn to Mithra*. Cambridge.
- Hertel, J. (1931) *Yašt 14, 16, 17*. Leipzig.
- Hintze, A. (1994) *Der Zamyād-Yašt*. Wiesbaden.
- Hoffmann, K. & B. Forssman (1996) *Avestische Laut- und Flexionslehre*. Innsbruck.
- Kellens, J. (1974) *Les noms-racines de l'Avesta*. Wiesbaden.
- Kellens, J. (1994) *Le panthéon d'Avesta ancien*. Wiesbaden.
- Kellens, J. (1995) *Liste du verbe avestique*. Wiesbaden.
- Lommel, H. (1927) *Die Yäšt' s des Avesta*. Göttingen/Leipzig.
- Malandra, W. W. (1983) *An Introduction to Ancient Iranian Religion*. Minneapolis.
- Panaino, A. (1990) *Tištrya*. Part I. Roma.
- Weller, H. (1938) *Anahita*. Tübingen.
- Wolff, F. (1910) *Avesta*. Strassburg.
- 佐藤 進(1960) アナイティカ I 『東京教育大学文学部紀要』26(史学研究), 1-13.
- 佐藤 進(1994) メディア国家形成に関する史料の分析 『立正大学大学院紀要』10, 83-195.
- 佐藤 進(1996) メディアおよびペルシアにおける民族と国家の形成 『オリエント』38(2), 16-37.

(立正大学文学部)